中嶋塾@東京　第1回「ビブリオ・バトル・ライター編」

ENT. No.1 (before)

私の見つけた５つの「感受性」を高める方法

本校では、コロナ以来となる飲み会が、5月以降、ぼちぼち再開されている。そこで、お店に向かう間中、頭を悩ますのが、「どこに座るか？」問題である。１２名が入れるお座敷にあがるとして、あなたならどこに座るだろうか？

A先生は到着した順に奥から詰めるタイプ。B先生は気を遣って靴を脱がずに皆を先に通すタイプ。C先生は、D先生とE先生の仲が悪いから、離れた席になるよう、うまく間に入るタイプ。いろいろな人がいる。それでいい。私の場合は、端っこと相場は決まっている。

なぜなら、コミュニケーションに自信がないから。いまの自分に足りないものの筆頭が「感受性」である。昔からあまり人の気持ちが理解できず、それゆえ人と話すこと、人とかかわることが苦手なのだ。感受性に乏しい教師の授業で、生徒が感受性を高めることはできるのか？名選手が名監督になるわけではないとは言うものの、これに限っては難しいだろうと思う。やはり、まずは教師自身が感受性を磨き、生徒にもそういう機会を与えていくことが必要だろう。

そこで、本レポートでは、「感受性」をテーマに、教師に何ができるのかを考えてみたい。

<目次>

１．教師の「感受性」を高める
　（１）教師の「メタ認知力」を磨く
　（２）相手への「関心を深める努力」をする
２．生徒の「感受性」を高める
　（３）生徒の「良さ」を引き出す
　（４）「こだわり」をもたせて、「良さ」を「個性」に引き上げる
　（５）「想像力」を鍛える

１．　教師の「感受性」を高める

（１）教師の「メタ認知力」を磨く

中嶋塾に入門して以来、自分の弱点と向き合うことが多くなり、反省する日々を過ごしている。しかし、その昔、「反省なら猿でもできる」というCMがあったが、必要なのは反省ではなく、振り返りである。振り返りを通じて、メタ認知力を磨く（現在のできていることと問題点を認識し、次の一歩をどの向きに踏み出すのか決める）ことが、成長には不可欠だからだ。そのためには、２つ方法がある。

１つは、生徒アンケートを活用すること。特に、授業の改善点を記述してもらい、それを真摯に受け止めることで、自分の授業を客観的に捉えることができる。また、Can-Doリストや評価基準を参考に、

目標への到達度を記述させれば、授業が効果的だったのかどうかを知ることができる。そうすることで、次につけるべき力や、いま生徒にとって必要な足場かけがひらめいたりするだろう。

もう１つは「人に見られる」機会を作ることだ。２学期には、同僚を招いて、授業見学をしてもらう予定である。ただ、見てもらうわけではない。研究授業は山場であり、起承転結の「転」である。その前に、「つけたい力」を設定し（起）、情報カードや３色付箋紙を用いた指導案の分析をしておく（承）ことが必要だ。見学後には、模造紙をと３色の大きめの付箋紙を用いた分析を行い、振り返りをする（結）。生徒や同僚の声を受けて、自身を客観視することで、教師の「メタ認知力」を高め、自分目線を脱し、「相手目線」を習慣とすることが肝要だ。

（２）相手への「関心を深める努力」をする

皆さんは、中嶋塾開塾に当たって、「塾訓」が送られてきたのを覚えておられるだろうか？その２つ目には、こう書かれている。

２）私は、周りに人が集まってくる、思わず話が聞きたくなる「中身」のある人間をめざします。そのためには、自分自身が「相手のために」をモットーに、知的好奇心を持ち、相手への関心を深める努力をすることです。（下線は筆者）

（相手への関心を深めるのは、「努力」によるものなのか！）と、心底驚いたことを、昨日のことのように覚えている。マイポテトの活動を終えた今だからこそ、この言葉を、より深く理解できる。生徒理解を深めることは、いわゆるコミュ障の人間にもできるのだ。「人生はやるか、やらないか」なのだから。夏休みが終わって、早速、生徒カルテ（座席表）を書き始めた。まだ数回しかやれていないが、今までに比べて、明らかに細やかに観察できる。インプットの効率を上げるのはアウトプットだが、「空白の座席表を埋めねば」と思うと、不思議と生徒の様子がくっきりと見えてくるのだ。

（今まで誰が辞書をもってきているか知らなかったから、辞書引いてる生徒には☆印をつけておこう）

（いつもは寝ているAくん、Interview Mappingは一生懸命話してるぞ。「話すの好き？」と書いておこう）（BくんとCくんをペアにしたら喜んでいたな、よし「仲良し」と書いておこう）

日常の学習姿勢から努力している姿、生徒間の人間関係など、どんどん情報が集まってくる。

（「書く」というひと手間を加えることで、こんなにも観察力が変わるのか・・・）

２．生徒の「感受性」を高める

（３）生徒の「良さ」を引き出す

教師主体の授業では、生徒の良さは引き出せない。良さが表出するのは、生徒の作品（発表含む）の中である。だから、大切なのは、生徒が動く場面をどれだけ作れるかだろう。生徒が「やってみたい」と思えるのは、教師が成績をつけるために作品を待ち構えているときだろうか。それとも、生徒の作品を心待ちにしていて、作品を見るや否や、「色遣いがいいね」とか「気持ちがすごく伝わってきたよ」と受け止めてくれるときだろうか。

先日、2学期授業開き（中2）では、例年通りなら単語や文法の夏休み明けテストをやるところだが、Small Talkから始めてみた。

教師： What did you do during the summer vacation?

生徒B： I went to Ecuador.

（他生徒：え、エクアドル！？）

教師： You what? Ecuador! Really?

思わず、意表を突かれた。他の生徒たちも、興味津々。Aくんへの質問タイムを取ることにした。英語が苦手なAくんだが、聞かれたことに対して、I ate fish soup.　I stayed six days. I saw アザラシ. など、一生懸命答えていた。「生徒が活躍する場面」を作ったからこそ、「できるようになりたい」と願って、努力するAくんの姿を見ることができた。

2学期の授業が進んでいけば、作品作りをすることもある。作品を作っている段階でも、「休み時間も使って一人ひとりの気持ちに寄り添い、やさしく問いかけることで、共感」（新刊本p.154）してくれる教師を目指したい。

（4）「こだわり」をもたせて、「良さ」を「個性」に引き上げる

「良さ」を引き出すには、生徒が活動する場面を用意すると述べた。しかし、単に活動を用意していれば、生徒がワクワクして取り組んでくれるわけではない。活動をやりっぱなしにして、英語力がつかないまま終わっているというのも１つの原因だろう。だが、ここでは、生徒がワクワクする原理として、「こだわり」をもたせることを取り上げたい。

「こだわり」は個性であり、自他を区別するものであるから、個性豊かな作品に触れたとき、生徒は自ずと「知りたい！」と思うものである。

今後取り組みたいことの１つに「和訳」がある。和訳は、批判も多い所ではあるが、うまくやれば、推論発問と全く同様の効果が得られると考えている。文脈に応じて、場面や登場人物の心情を深く読み取らなければ、適切な和訳はできないからである。

大学生の頃、友人たちと Celine DionのMy Heart Will Go Onを全訳したことがある。お互いの恋愛観がぶつかり、「愛とは何か」という哲学的テーマを侃々諤々、優に3時間は議論した。詩や歌詞の翻訳は面白い。

本校で採用している教科書では、各単元の冒頭に、題材に関連する有名人のセリフなど格言めいたものが掲載されている。単元末に、これを和訳するのも一興だろうと思う。さまざまな訳語が提案され、根拠をもって互いに議論をぶつけ合う、そんな活気ある教室が目に浮かぶ。ただ生徒を動かすだけでなく、揺さぶり、「こだわり」をもたせ、作品に「個性」を宿らせることで、それが可能になるだろう。

（5）「想像力」を鍛える

和訳は推論発問になりうると述べた。和訳以外に、どんな推論発問が可能だろうか？推論発問では想像力が培われる。例えば、「なりきり作文」（動物やモノになりきって身の回りの世界を描くタスク）では、「教室に飛び込んできた蜂」の気持ちを想像する必要がある。あるいは、演読。これも、対話文なら、その場面を具体的に思い描いたり、登場人物の心情を読み取ったりしたうえで、どこで間を取るか考えたり、話し方を工夫したりする。

新刊本を読んでいて、ひときわ印象的だった発問がある。それは、「このページの場面を想像し、聞こえてくる音を全て書き出しなさい」（新刊本p.45）だ。音、すなわち聴覚を通じて知覚される世界を、文字情報から読み取るという、五感に訴える発問だ。これはシンプルな問いだが、かなり想像を逞しくしなければ答えられない。

塾長が以前、スキット指導のポイントとして、「いま周りに誰が見えますか？何がありますか？」という問いかけを紹介してくださった。これは、場面をvisualizeさせる発問であり、まさしく五感に訴える発問である。

これから、対話文や物語文を扱う際には、「音」「景色」「味」「感触」「におい」を問うことで、平面の教科書を立体的に立ち上がらせるよう仕向けていきたい。それは、他者の気持ちを理解するという「感受性」を、間違いなく高めてくれるだろうから。

最後に、Robin Williams 主演の映画 *Patch Adams* から、どうしても紹介しておきたいセリフがある。西洋医学の価値観を批判するものだが、これを授業に置き換えたら、どうなるだろうか。

“We have to treat the patient as well as the disease. That's why we have to dive into people, wade into the sea of humanity, Truman.”

Entry No.❶（本選）

私が見つけた５つの「感受性を高める方法」

本校では、コロナ禍が一区切りして以来、飲み会がぼちぼち再開されている。お店に向かう間ずっと頭を悩ますのが、「どこに座るか？」問題である。12名が入れるお座敷にあがるとして、あなたならどこに座るだろうか？

A 先生は、到着した順に奥から詰めるタイプ。B 先生は、気を遣って靴を脱がずに待ち、皆を先に通すタイプ。C 先生は、仲の悪い人たちの間にうまく入るタイプ。いろいろな人がいる。それでいい。私の場合は、端っこと相場は決まっている。

なぜなら、コミュニケーションに自信がないから。

いまの私に足りないものの筆頭が「感受性」である。昔からあまり人の気持ちが想像できず、それゆえ人と話すこと、人とかかわることに苦手意識がある。教師自身が感受性を磨き、生徒にもそういう機会を与えていくためには、どのようなことができるだろうか？

<目次>

1．教師の「感受性」を高める
（1）教師の「メタ認知力」を磨く
（2）「関心を深める努力」をする
2. 生徒の「感受性」を高める
（3）生徒の「良さ」を引き出す
（4）「こだわり」をもたせる
（5）「想像力」を鍛える

1．　教師の「感受性」を高める

（1）教師の「メタ認知力」を磨く

中嶋塾に入門して以来、自分の弱点と向き合うことが多くなり、反省する日々を過ごしている。しかし、その昔「反省なら猿でもできる」という CM があったが、必要なのは反省ではなく、振り返りである。振り返りを通じて、「メタ認知力」（新刊本 p.19）を磨くことが、成長するには不可欠だからだ。そのために、実践したいことがある。

1つは、生徒アンケート（p.60）。授業の改善点を記述してもらうことで、自分の授業を客観的に捉えることができる。また、Can-Do リストや評価基準を参考に、目標への到達度を記述させれば、生徒の到達度を知ることができる。それにより、生徒にとって必要な足場かけがひらめいたり、次につけるべき力が分かったりしてくることが期待される。

もう1つは、「人前でやる」機会を作ることだ（p.41）。2学期には、同僚を招いて、授業を見てもらう予定である。ただ見てもらうのではない。研究授業は山場であり、起承転結の「転」である。その前に「つけたい力」を設定し（起）、情報カードや3色付箋紙を用いた指導案の推敲をしておくこと（承）が必要だ。見学後には、模造紙と3色の大きめの付箋紙を用いた分析を行い、振り返りを行う（結）。

生徒や同僚の声に助けられて、自身を客観視することで、教師の「メタ認知力」を高め、「相手目線」を習慣としていきたい。

（2）「関心を深める努力」をする

自分をメタに観る方法を検討した。今度は、他者を観る方法を考えたい。皆さんは、中嶋塾開塾に当たって、「塾訓」が送られてきたのを、覚えておられるだろうか？その2つ目には、こう書いてある。

自分自身が「相手のために」をモットーに、知的好奇心を持ち、
相手への関心を深める努力をすることです。（下線は筆者）

（相手への関心を深めるのは、努力によるものなのか!?）

と、心底驚いたことを、昨日のことのように覚えている。マイポテトの活動を終えた今だからこそ、この言葉を、より深く理解できる。生徒理解は、センスではない。手間暇をかけるということだ。それなら、私にだって、できるはずだ。「人生はやるか、やらないか」なのだから。

夏休みが終わって、早速、生徒カルテ（p.59）を書き始めた。まだ数回だが、今までに比べて、よほど細やかに観察できている。「空白の座席表を埋めねば」と思うと、不思議と生徒の様子が、くっきりと見えてくるのだ。これは、アウトプットの機会があると、インプットの効率が上がることにも似ている。

（辞書を引いている生徒には☆印。いつも引いていない生徒が分かったら、声掛けしよう。）
（よく寝ているＤくん、Interview Mapping は一生懸命だ。「話すの好き」とメモ!）
（ＥくんとＦくんをペアにしたら喜んでいたな。よし「仲良し」と書いておこう。）

学習姿勢から努力している姿、生徒同士の人間関係など、どんどん情報が集まってくる。

（「書く」というひと手間を加えることで、こんなにも観察力が上がるのか・・・）

２．生徒の「感受性」を高める

（３）生徒の「良さ」を引き出す

教師主体の授業では、生徒の良さは引き出せない。良さが表出するのは、生徒の作品や発表の中である。だから、大切なのは、生徒が活躍する場面を作ることだ。

先日、2 学期の授業開き（中 2）では、例年ならば、宿題の確認テストをやるところを、思い切って Small Talk から始めてみた。以下は、そのときの生徒とのやり取りである。

教師：What did you do during the summer vacation, G-kun?
生徒 G：I went to Ecuador.
教師：You what? You went to Ecuador? Really?

意表を突かれた。クラスの生徒たちも、興味津々。予定を変えて、G くんへの質問タイムを取ることにした。英語が苦手な G くんだが、聞かれたことに対して、"I ate fish soup. " "*I stayed six days. " "*I saw a-za-ra-shi. " などと、一生懸命に答えていた。

「生徒が活躍する場面」を作ったからこそ、「できるようになりたい」と願って努力する G くんの姿を、見ることができた。

これから、作品作りや発表の機会もある。その過程においても、生徒の良さを引き出せるように、「休み時間も使って一人ひとりの気持ちに寄り添い、やさしく問いかけることで、共感」（p.154）してあげられる教師を目指したい。

（4）「こだわり」をもたせる

良さを引き出すには、生徒が活躍する場面を用意する必要があると述べた。しかし、単に活動を用意していれば、生徒が意欲的に取り組んでくれるわけではない。ここでは、生徒がワクワクする原理として、「こだわり」をもたせることを、取り上げたい。

「こだわり」は個性であり、自他を区別するものであるから、個性豊かな作品に触れたとき、生徒は自ずと「知りたい！」と好奇心が刺激されるものである。

大学生の頃、友人たちと Celine Dion の *My Heart Will Go On* を全訳したことがある。お互いの恋愛観がぶつかり、こだわりのある訳語を誰も変えようとしない。結局、「愛とは何か」という哲学的テーマを侃々諤々、優に 3 時間は議論した。歌詞や詩の翻訳は面白い。

「愛」が題材の単元があれば、*Love* と題された詩（p.48）を和訳するのも一興だ。和訳している途中で、大阪の生徒の訳を少しだけ見せたら、どうなるか？きっと、それを超えようと、必死に考えるだろう。そして、同級生の作品を見て、「なんでそう訳したの？」と、身を乗り出して尋ねる姿が、そこかしこに見られるに違いない。

自分なりに根拠をもって練り上げた多様な和訳が提案され、互いに議論をぶつけ合う、そんな活気ある教室が目に浮かぶ。ただコミュニケーション活動を行うのではなく、揺さぶって、自己決定による「こだわり」をもたせ、作品から表現者としての「個性」が感じられるようにしていきたい。

（5）「想像力」を鍛える

「こだわり」をもたせるには、多様な答えがありうる推論発問は有効な手段である。（その意味において、先述の和訳は推論発問だった。）「演読」や「なりきり作文」なども、高度な推論が求められて「こだわり」が生まれる魅力的な活動だ。他には、どんな問いかけができるだろうか？

新刊本を読んでいて、ひときわ印象に残った発問がある。それは、「このページの場面を想像し、聞こえてくる音を全て書き出しなさい」（p.45）というものだ。「文字から音を聞く」という、五感をリンクさせた発問。シンプルな問いだが、想像を逞しくすることが求められる。

塾長が以前、スキット指導のポイントとして、「いま周りに誰が見えますか？何がありますか？」という問い方を紹介してくださった。これは、場面を visualize させる発問であり、まさしく五感に訴える発問である。推論発問は、「想像力」を鍛えるのだ。

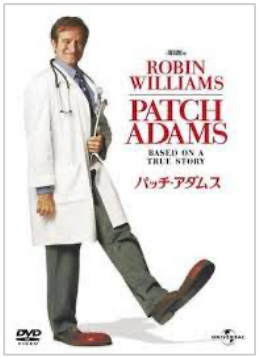
これから、対話文や物語文を扱う際には、「音」「景色」「味」「感触」「におい」を問うことで、平面の教科書を立体的に立ち上がらせるように仕掛けていきたい。それは、他者の気持ちを想像するという「感受性」を、間違いなく高めてくれるだろうから。

最後に、映画 *Patch Adams* で、医学部で学ぶ Patch が、友だちの Truman に語りかけるシーンを紹介する。西洋医学の価値観を批判するものだが、教育に置き換えたら、どうだろうか。

We have to treat the patient as well as the disease.

That's why we have to dive into people,

wade into the sea of humanity, Truman.



・・・飲み会でも、真ん中に dive してみようか？

筆者のコメント（推敲するときに工夫したこと、反省したこと）　　山内 崇史（7G）

「A4サイズ２～３ページ」という条件がありました。余白を狭くして 3 ページに収めていたのですが、提出後、余白が整えられた結果、3.5 ページになってしまっていました。3 ページ、だらだらと本筋と関係ないことも書いていましたが、推敲によって結果的に密度の濃いものになったと感じます。

５つの項目は、書き手自身の中では、有機的につながっておりました。執筆の準備段階で、次のようなステップを踏んでいたからです。

① 本を読みながら、キーワードをマッピングで書き出す

② グルーピング、ラベリング、ナンバリングをする

③ １項目ずつ情報カードにまとめ直す

④ 各項目の中で、授業でやったことや、これから実践したいことに★印をつける（それがその項目の「転」になる）

⑤ 情報カードを並べ替えて、論理展開がスムーズになるよう、再調整する

しかし、予選の際に頂いたコメントに、「２（４）については段落の繋がりが見えず、読み手の思考が止まってしまったので、何を伝えたいのかを整理するともっとよくなると思いました」と書かれていました。そこで、当該項目について見直すと同時に、改めて全体を俯瞰して、前の項目との「つながり」を明示するような書き方に直しました（オンライン塾の方々（7G）と協働して作り上げた振り返りレポートで学んだことです）。

次に、イラストを加えました。元々、ページ超過していたところに、イラストを加えるとなると、無駄なイラストは入れられないため、かなり悩みました。一応考えたのは、次の 2 点です。①イラストの配置をできるだけ工夫する、②イラストは「きっかけ」と位置付ける。例えば・・・

①：目線は左から右へと動く。反省ザルの画像を、左に配置すると、「なんでこの絵があるんだろう？」と文章を読み始めてもらうための「ナッジ」になるのではないか？パッチ・アダムスは、右下に配置すれば、文章を読み終わってから、目に留まり、余韻を感じられるのではないか？

②：実は、当初（1）では「メタ認知」をネット検索し、出てきた画像を貼っていました。それが中心テーマだったから、それを載せるのが妥当と思ったのです。しかし、敢えて周縁的な画像（反省ザル）を載せる方が、印象に残りやすく、かつ、サルを思い出せば「反省ではなくて振り返りが大事」という話を思い出してもらえるのではないかと考えました。もちろん、それが唯一の正解というわけではないと思います。他の方のイラストの使い方も研究します。

最後に、音読をしました。音読をすることで誤字脱字に気がつくのはもとより、読点の打ち方にも注意が向きました。言い回しを変えたり、読点を打ち直したり（ときに削除したり）するうちに、リズムが整って、文章が生き生きしていくのが分かりました。意外だったのは、音読によって、論理があやふやな箇所も気がつき、少しつなぎ言葉を加えたところもありました。

● ENT. No.2 (before)

私が見つけた、５つの「勘違いしていたこと」

(1) 授業とは、教科書本文を訳読すること？（2-3-1）

授業のゴールは「教科書本文を細部まで完璧に日本語訳できること」だと思っていた。だから、単元が変わっても、学年や校種が変わっても、授業でやることは毎回同じ。単語の導入後、本文を訳読する。そして、内容の詳細を問うような質問で理解度を確認していた。

しかし本書を読んで、それは「正しいゴール」ではなかったことを知った。正しいゴールは「学習指導要領」にあった。例えば、「読むこと」について。中学校学習指導要領には、その目標が「ア　日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする」「イ　日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする」「ウ　社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする」と記されている。

そのどこにも「細部まで完璧に」という文字はない。私は今まで「自己流の」ゴールに生徒を導こうとしていたことに気がついた。授業の「正しい」ゴール、それは「学習指導要領にある」力を身につけさせることである。

(2)生徒を飽きさせないために、色々な活動を取り入れるべき？（3-1-1）

生徒が夢中になる授業とは、「たくさんの活動が行われる授業」だと思っていた。だから、５０分の授業にいくつもの活動や問いを盛り込んできた。しかし、本当に生徒が「夢中」になる授業とは、活動が精選された授業だということを本書で学んだ。

必要なのは、「生徒につけさせたい力」から逆算して、授業の「山場」となる活動を決めること。そして、そこにつながらない活動は思い切って省いてしまう勇気だ。「山場」の活動で、生徒が思考する時間や、互いに関わりあう時間を確保する。そうすることで生徒の「主体性」が引き出され、飽きのこない授業を展開することができるということを学んだ。

(3)はじめ！の合図をすれば、勝手に生徒が話し合う？(4-1-3)

教師が一方的に話す授業では、生徒はいつも退屈そうだ。そんな生徒の様子に焦り、やみくもに「ペアで話そう」と指示をするのだが、どのペアも５秒で話し合いが終わってしまう。次第に、私語が飛び交う教室…。

本書を読んで、ペア活動が機能しなかった理由は、教師が投げかける「問い」にあることがわかった。「問い」には２種類ある。答えが１つしかない「切れる発問」と、個人によって答えがいくつも考えられる「つながる発問」だ。前者では、話し合いが「答えの確認をするだけ」の形式的なものとなっ

てしまうので、次第に、授業に関係のない私語が始まってしまう。生徒が「ペアでの会話」に意味を見出すには、Why?やHow?から始まるような「つながる発問」が必要だということを学んだ。

(4) 授業アンケートは意味がない？(2-2-3)

本校では毎学期に授業アンケートを実施している。その質問項目は「先生は教科書以外の教材も使っているか」「授業の速さはちょうどよいか」といったものとなっている。これに対して生徒は5段階評価で回答をする。このような「形式的」なアンケートに慣れていた私は、授業アンケートなんて意味がないものと思い込んでいた。

しかし、本書を読んで、授業アンケートが教師にとっても生徒にとっても意味のある使い方ができることを知った。ポイントとなるのは、「記述式」のアンケートとすることだ。教師は、記述内容の解釈によって、いくらでも気づきを得て「授業改善」のヒントとすることができる。一方で生徒は、自分の取り組みを言語化して振り返ることで「メタ認知能力」を高めることができるからだ。「決まりごとだから」とただ受け入れるのではなく、常に、「何のために」を考える。そうすれば、いくらでも自分の授業や生徒の成長につなげていくことができるのだ。

(5) あの子は本当に「ダメな子」？(5-2-6)

昨年担当していたクラスの中に、授業中はいつも寝ていて、指名しても「わからない」と一点張りの生徒がいた。私は心の中で「この子には何をいっても、どう教えてもダメ」と思い込んでいた。

最後の授業はテスト返却日となった。相変わらず赤点だったその子は、自分の点数を見てこう言った。「先生が『やる気が出るような授業』をしてくれたら、私だって頑張るのになぁ。」それを聞いて、初めて「生徒の成長を阻害する原因は自分にある」という考えに至った。頭が真っ白になった。「そうだよね、ごめんね」としか言えなかった。

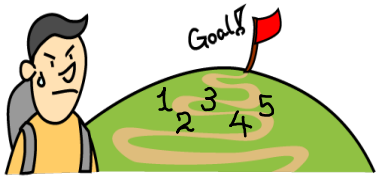
教師が「正しい」授業のゴールを理解して、見通しを持って指導できない限り、生徒に力をつけさせることも、生徒のやる気に火をつけることもできない。そう、いつだって、原因は教師にある。「あの子」は決して「ダメな子」なんかじゃないんだ。今ならばそう思える。

Entry No.❷（本選）

私が見つけた５つの「勘違い」

「先生が『やる気が出るような授業』をしてくれたら、私だって、もっと頑張ったのにな。」昨年度の最後の授業で、クラスの一人がつぶやいた言葉だ。新卒の私には現実を直視できずに「やる気がないのは、生徒の問題だ」と決めつけた。しかし、本書を読んだことで、私は授業デザインにおいていくつかの「勘違い」をしていたことに気がつくことができた。これから続く私の「勘違い」に「ドキッ」とした若手の先生がいたら、本書の購入を強くお勧めしたいと思う。

(1) 授業とは、教科書本文を訳読すること？（2-3-1）



授業の正しいゴールって何だろう。授業でつけるべき力ってなんだろう。教科書のどこにも書いていないから、私は「教科書の本文を細かい部分まで正しく理解すること」と思っていた。

しかし、本書には、正しいゴールは「学習指導要領」にあると書いてある。机の奥にしまっていた学習指導要領を開いてみて、ドキッとした。

> ア　日常的な話題について，使用される語句や文，情報量などにおいて，多くの支援を活用すれば，必要な情報を読み取り，書き手の意図を把握することができるようにする。
>
> （英語コミュニケーションⅠ「読むこと」より引用。）

どこを探しても「教科書」「細かく」という文字はない。ここで初めて、自分がゴールを「勘違い」していたことに気がついたのだ。

(2) 生徒を飽きさせないために、色々な活動を取り入れるべき？（3-1-1）

では、正しいゴールに向かって、どんな活動を取り入れるべきなのだろうか。本書には、生徒を「夢中」にさせるには、活動を「精選」せよと、とある。これまでは、飽きさせないために、とにかくたくさんの活動を詰め込むのが良いと思っていたのが、大きな「勘違い」だったようだ。

私はまず、次の単元の「山場」となる活動を「発表」の１つに絞った。次に、発表につながらない、文型の確認や、文章の詳細を確かめる問題は思い切って省いた。その代わりに、「発表」に向けて生徒が準備をする時間や、互いにコメントをするための時間を十分に確保した。

「発表」に活動が絞られたことで、生徒は高い集中力を発揮して準備に取り組んだ。

チャイムがなったとき、「えっ、もう英語終わり？」というつぶやきが聞こえた。活動を欲張って、「思考すること」に十分な時間を割けなかったときには、聞くことができなかった言葉に驚いた。

(3) はじめ！の合図をすれば、勝手に生徒が話し合う？(4-1-3)

宇宙食に関する単元を扱ったときに、本時の中心発問を“What is your ideal space food? Why?”としたところ、“Miso soup. I can feel my

mother.” “The bread sold in our vending machine. I can remember my school life.”など、ペア同士で様々な意見が飛び交い、教室は大いに盛り上がった。

退屈そうな生徒の様子に焦り、やみくもに「ペアで話そう」と指示をしていた頃、どのペアも５秒で話し合いが終わり、すぐに教室が沈黙に包まれていたのが嘘のようだ。

本書を読んで、ペア活動は、教師が投げかける「問い」次第だとわかった。

「問い」には２種類ある。１つは、答えが１つに定まる「切れる発問」。もう１つは、個人によって答えがちがうため、会話が「つながる発問」だ。

私は答えを確認したら終わってしまう「切れる発問」ばかりをペアにやらせていたが、必要なのは「価値観」の違いを生むような、Why?や How?から始まる「つながる発問」だったのだ。

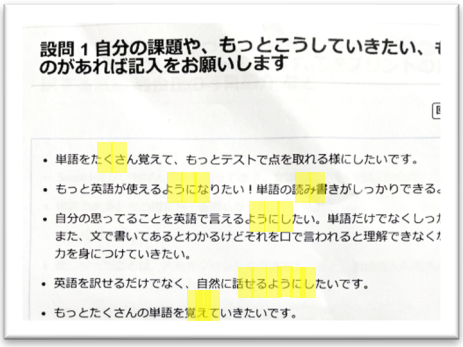
生徒がなかなか話さないなあ、というのはただの「勘違い」だった。つながる発問があれば、生徒は実にいきいきと話し始める。

(4) 授業アンケートはとる意味がない？(2-2-3)

本校では毎学期に授業アンケートを実施している。生徒は各項目に５段階評価で回答をしていくのだが、形式的なものゆえ、教師も生徒も重要視していないのが現実だ。だから私は、授業アンケートなんて意味がないと「勘違い」していた。

しかし本書を読んで、使い方によっては、いくらでも授業改善や生徒の成長につなげていくことができると知った。

ポイントは、「記述式」のアンケートとすることだ。教師は、記述内容から生徒の現在地を把握し、「授業改善」のヒントとすることができる。一方で生徒は、自分の取り組みを言語化して振り返ることで「メタ認知能力」を高めることができる。


設問１自分の課題や、もっとこうしていきたい、
のがあれば記入をお願いします

- 単語をたくさん覚えて、もっとテストで点を取れる様にしたいです。
- もっと英語が使えるようになりたい！単語の読み書きがしっかりできる。
- 自分の思ってることを英語で言えるようにしたい。単語だけでなくしっ
また、文で書いてあるとわかるけどそれを口で言われると理解できなく
力を身につけていきたい。
- 英語を訳せるだけでなく、自然に話せるようにしたいです。
- もっとたくさんの単語を覚えていきたいです。

先日、新しい単元に入る前に、「今課題と感じていることは何か」を聞いたところ、多くの生徒が「単語が覚えられていないこと」「自然に英語を話せないこと」と回答した。

入学時に、「４技能の中で、話す事が最も苦手」と回答する生徒がほとんどを占めていたこのクラス。これまで、発話に対する抵抗感をなくそうと、話す「量」を重視してきた。次第に生徒たちが、「話したい」という思いと「話せない」という葛藤を抱くようになったことや、その葛藤が、彼女たちの英語学習を動機づけていることが読み取れた。

これからも授業アンケートを活用して、ペーパーテストでは分からない、生徒の「内なる声」や、生徒の「成長」を詳細に把握できるようにしていくつもりだ。

(5) 生徒に自信をつけさせること＝たくさん褒めること？ (5-2-2)

先述したアンケートの自由記述欄に「英語ができると思ったことが、人生で１度もない」と書いた生徒がいた。彼女はクラスのムードメーカー的存在で、いつも積極的に発言してく

れる生徒だ。彼女に自信をもってほしい。たくさん褒めればいいのかしらと、「いつもたくさん発言してくれてすごいよ。ありがとう。」と声をかけ続けるが、「うーん、そうかなあ」と、釈然としない様子だ。

本書を開くと、「人がほめられて嬉しいのは、自分が頑張ったことで成果が現れたとき、自分の行為に誇りが持てたとき」とあった。

改めて彼女のことを考えてみる。すると、聞き取り式の単語テストの点数がグッと上がっていることに気がついた。

次の授業にて、「〇〇さん、聞き取りのテストの点数伸びてるね。家で音読練習してるの？」と聞いてみた。「はい。授業で発言するときに、アルファベット読みしかできないのが嫌だったし、ちゃんと発音できるようになりたくて、練習を始めました。」

「(なるほど、そうだったのか…) 発音練習したから、リスニング力もついてきているんだね。努力の成果だね。」と声をかけると、「えー、そうですかあ？」と恥ずかしそうに、それでいて嬉しそうに笑った。

ただ褒めれば自信がつく、というのは私の「勘違い」だった。大切なのは、生徒の努力の過程や、その末にできるようになったことを、きちんと認めることだったのだ。

筆者のコメント（推敲するときに工夫したこと、反省したこと）

平田 海里（1G）

1 つながりをもたせること

オンライン塾との合同研修で振り返りを書いた際に、第１グループではメンバー同士の原稿の「つながり」をもたせることに、多くの時間を費やしました。その甲斐あり、出来上がった原稿はグループで「１つの作品」として完成したように感じています。今回はその経験が生きて、(1)～(5)の各パートを「つなげよう」と意識して推敲することができました。改めて、合同研修という学びの場をご提供いただいた塾長とオンライン塾の皆さまには、感謝の気持ちでいっぱいです。

2 読み手（相手）目線になること

No.1の原稿を予選で読んだ際に、読み手が知りたいのは筆者の「失敗談」や「反省」ではなくて、「本書の内容を自分のネクストステージに活かそうとしているか」「本書を読んで自分の気持ちがどう動いたのか」だということに気がつきました。そこで、自分の「反省」部分は削減して、「本書から何を学び、それをどう活かした(活かしたい)か」について加筆しました。

また、予選で得た気づきがもう１つあります。読んでいて「ワクワク」する原稿には、共通して「イラスト」「写真」「問いかけ」「比喩」といった「相手を惹きつける工夫」があるということです。

原稿を単なる「自分の課題」と考えるのではなく、「読み手のいる作品」と考えることで、こうした「相手目線の工夫」が可能になることに気がつきましたところで、私は、まだ「比喩」を書く力が未熟です。そのため、どうしてもエピソード中心の文章になってしまいます。これは一朝一夕で身につく力ではないと思うので、引き続き、自分が憧れている塾生の文章を音読筆写していきます。

書き物と「読み手」と、授業と「生徒」の関係は同じであることを痛感する日々です。書くことを通じて、さらに「相手(生徒)目線」を身につけられるように、これからも楽しみながら努力を続けます。

3 音読すること

本選では、オンライン塾生の皆さまにも原稿をお読みいただくということで、とても緊張しながら推敲しました。書いた文章は何度も「音読」して、違和感がないかを確かめました。もともと書いた文章を何度も「黙読」する習慣はあったのですが、口に出すことによって、より一層文章の「ねじれ」や「不自然さ」に敏感になりました。

4 終わりに

今回の推敲を通じて、たくさんの「気づき」を得ました。これもすべて、オンライン塾生の皆さまが「読み手」を引き受けてくださったからです。最後になりますが、改めて感謝を申し上げます。これからも中嶋先生のもとで学ぶ「同志」として、どうぞよろしくお願いいたします。

ENT. No. 5 (before)

私が見つけた５つの「楽しい」

中嶋先生の新著『英語教師の授業デザイン力を高める３つの力』を読み、私が発見したこと。それらには共通して、生徒と教師が学びや授業を楽しむことができるアイデアが満載でした。今回は「楽しい」を軸にして、私の発見を５つにまとめて紹介します。

⑴　活用できるから「楽しい」

「教師が『子どもを型にはめる』のではなく、『型を自分なりに活用できる子どもの育成』を目指している」。

フィンランド・メソッドでアヤトゥス・カルタが利用されている様子が紹介されている中で、私の心に深くに刺さったフレーズ。ここでいう「型」はアヤトゥス・カルタ、つまり思考ツールの一種です。自分の理解したことや考え、そしてその根拠を言語化することが求められているフィンランドの学校において、「型」が大事に扱われているという事実は、「守破離」を大事にしてきた日本人にとっては非常に有益な教育的示唆であることに違いありません。

剣道や茶道など、修業における過程を表した「守破離」。初歩の段階では、教えの神髄を理解するために型を守ることを徹底するものの、最終的にはその型を自由に活用できるようにするという流れを表したものです。つまり、「型を自分なりに活用できる」ようになること。自分で考えて何かを活用して課題に取り組めていると感じるとき、その人は「楽しい」と感じられるはずです。

著書の中には「ツールはあくまで『手段』です」とも書かれています。思考ツールを使いこなすことを最終ゴールにするのではなく、それを活用しながら課題を達成することができること、そしてそのさらに先にある「楽しい」に向けて思考ツールを活用すること。手段に取り憑かつかれることなく、「楽しい」を目指した授業を実践してきます。

⑵ 協働できるから「楽しい」

私が大好きなバンド、the Beatles。その二人の作曲の過程が「協同」から「協働」に変わっていったエピソードが紹介されていました。二人が不足を補完し合っているような状態から、互いの知恵を出し合って最後の仕上げをする関係へ。足し算ではなく掛け算の関係。One-way ではなく two-way の関係。足し合わせた結果の姿は想像できますが、掛け合わせた成果は想像しにくいもの。最終的な成果物が想像できないからこそ面白い、そうだからこそ協働は「楽しい」のだと改めて思いました。

協働のために必要な工夫、それは「グレーゾーン」を作ることである。そう新著から学びました。つまり担当や分担をはっきりさせ過ぎず、お互いの特性や得意・不得意を踏まえて課題に取り組むことが

できる。つい仕事や課題にしっかり線引きして分担をはっきりさせたがる癖のある私に、グレーが「楽しい」を導いてくれるのだと気付かせてくれました。

⑵　Gap があるから「楽しい」

これまでの私が意識できていたのは information gap のみ。新著を読んで私は自分の不足さを思い知らされました。opinion gap（意見の差）と reasoning gap（理由の差）と、これまでの私が言語化してこれなかった「差」に気付かされるとともに、「そうだよな、相手の新たな一面が知れたときって楽しいもんな」と腑に落ちている自分がいました。

本書にも書かれているように、多様性は「楽しい」を引き出します。では多様性を授業に生み出すにはどうしたらよいか―そう、「推量発問」です。Why と How を中心に尋ねて生徒の多様性を引き出し、意見や理由の差を生み出す。差があると授業が「楽しい」。まだまだ自身の編集力を高める余地があることにワクワクしています。

⑷ 自分ごとだから「楽しい」

「目標を生徒が自己決定すれば、課題が "自分ごと" になります。」

この一文を実現しているのがこの新著です。「はじめに」の中で「この本を読む順序（推奨コース）」を 3 つ準備してくださっており、読者に選択権を与えているのです。自分で決めるから責任が伴い、「やらなければ」と思ってしまう人間の心理を巧みに使い、自己決定させて読書経験そのものを「自分ごと」にする仕掛けがあるのです。

「自分ごと」になったことには愛着が湧きます。そして「楽しい」と思えるようになります。これを授業に落とし込むためにはどうすればよいのか。一番のヒントは著書の中にありました。帯活動で行っている chat のトピックを、 "My favorite (　) is…" にするのです。これまでは music や food などのトピックを事前に提示してからチャットに取り組ませていましたが、今振り返るとこちらで与えすぎてしまっていました。どう考えても、(　)内を自分で考えるという自己決定の機会があった方が、話し手も聞き手も「楽しい」に決まっています。

⑸ 五感を使うから「楽しい」

最後は、私が新刊を読んでいて一番衝撃を受けたこと。

「そうやってすぐに結論を出そうとしたら面白くないよ（笑）。」

『孤独のグルメ』作者の久住昌之氏の言葉の引用です。そしてこの言葉を引用している項のタイトルが「『うまくいかない』からこそ大切にしたいこと」。

「うまくいかない、どうしたらいいんだ…。」と悩んでいた自分のことを思い出しました。そして、その時の自分の視野がとても狭くなっていて、何をするにも頭でっかちになってしまっていたことも。結論ばかりを急いでいて、最短距離こそが正義と決めつけていた自分。

本当に浅はかでした。「自分の足と自分の五感を使って考えるからこそ楽しい。」この一文を読んだとき、胸が締め付けられる思いでした。最短距離で結論に至ったとしても、それは全然楽しくない。自分で感覚を通して経験したものこそ、教師も生徒も「楽しい」ものなのだと。

おそらく五感を使って考えるような授業は時間も手間もかかるでしょう。「最短距離」を追い求める教師・生徒からすれば、きっと遠回りでしかないかもしれません。しかし、ここで久住氏の引用に戻ると、最短距離は楽しくない。「楽しい」授業を目指すために、もっと自分の感覚を研ぎ澄ませる。そして生徒にも様々な感覚を使って学んでもらう。そういった授業を実現できるように今後一層の研鑽を積んでまいります。

以上、５つが私の発見です。そして何よりこの文章を書いている過程が、とても「楽しい」経験でした。この文章を書くという機会を与えてくださった中嶋先生に感謝です。

Entry No.❺（本選）

私が見つけた５つの「楽しい」

中嶋先生の新著『英語教師の授業デザイン力を高める３つの力』を読み、私が発見したこと、それらには共通して、学びや授業を生徒と教師で「楽しむ」ことができるアイデアが満載でした。今回は「楽しい」を軸にして、私の発見を５つにまとめて紹介します。

① 活用できるから「楽しい」

「教師が『子どもを型にはめる』のではなく、『**型を自分なりに活用できる子どもの育成**』を目指している」（p.22）。

中嶋先生がフィンランドを視察なさった際にご覧になった「アヤトゥス・カルタ」の活用について、その授業の様子をご紹介してくださっている中の一文。ここでいう「型」はアヤトゥス・カルタ、つまり思考ツールの一種です。自分の理解したことや考え、そしてその根拠を言語化することを求めているフィンランドの学校において「型」が大事に扱われているという事実は、「守破離」を大事にしてきた日本の教育にとっても非常に有益な教育的示唆であることに違いありません。

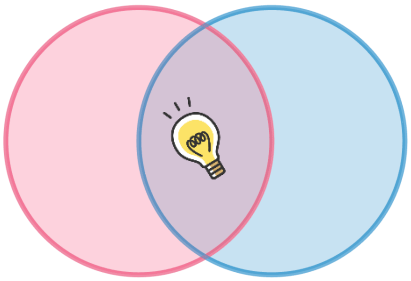
剣道や茶道など、修業における過程を表した「守破離」。初歩の段階では、教えの神髄を理解するために型を守ることを徹底するものの、最終的にはその型を自由に活用できるようにするという流れです。つまり、「型を自分なりに活用できる」ようになること。自分で考え、「型」を活用して課題に取り組めていると感じるときに、その人は「**楽しい**」と感じられます。

著書の中には「ツールはあくまで『手段』です」（p.22）とも書かれています。思考ツールを使いこなすことを最終ゴールにするのではなく、それを活用しながら課題を達成することができること、そしてその先にある「**楽しい**」に向けて思考ツールを活用すること。手段に取り憑かつかれることなく、「楽しい」を目指した授業を実践していきます。

② 協働できるから「楽しい」

私が大好きなバンド、the Beatles。その二人の作曲の過程が「協同」から「協働」に変わっていったエピソードが紹介されていました（p.189）。二人が相互に不足を補完し合っているような状態から、互いの知恵を出し合って最後の仕上げをする関係へ。足し算ではなく掛け算の関係。One-way ではなく two-way の関係。足し合わせた結果の姿は想像できますが、掛け合わせた成果は想像しにくいもの。最終的な成果物が想像できないからこそ面白い、そうだからこそ**協働は「楽しい」**のだと改めて思いました。

協働のために必要な工夫、それは「**グレーゾーン**」を作ることである。そう新著から学びました（p.191）。つまり担当や分担をはっきりさせ過ぎず、お互いの特性や得意・不得意を踏まえて課題に取り組む。つい仕事や課題にしっかり線引きして分担をはっきりさせたがる癖のある私に、グレーが「**楽しい**」を導いてくれるのだと気付かせてくれました。



③ Gap があるから「楽しい」

Gap や差異を意図的に活動に盛り込む ― 言語活動を行う際の鉄則として、活動を考える際に意識してきました。しかし、これまでの私が意識できていたのは information gap のみ。新著を読んで私は自分の不足さを思い知らされました。

Opinion gap（意見の差）と reasoning gap（理由の差）（p.171）

これまでの私が言語化できなかった「差」に気付かされるとともに、「そうだよな、相手の新たな一面が知れたときって楽しいもんな」と腑に落ちている自分がいました。

本書にも書かれているように、多様性は「**楽しい**」を引き出します。では多様性を授業に生み出すにはどうしたらよいか ―そう、「**推量発問**」です。Why と How を中心に生徒に尋ねて多様性を引き出し、意見や理由の差を生み出す。差があると授業が「**楽しい**」。

そしてこの工夫を実現するために不可欠なのが「**余白**」。土の粒子の間に隙間があるからこそ、根が様々な方向にすくすくと伸びていくのと同じように、授業に「余白」があると、生徒の思考も多様な方向に伸びていく。**「余白」を作って gap を生み出す教師の編集力** ― まだまだ自身の**編集力**を高める余地があることにワクワクしています。

④ 自分ごとだから「楽しい」

「**目標を生徒が自己決定すれば、課題が“自分ごと”になります。**」（p.117）

この一文を実現しているのがこの新著です。「はじめに」の中で「この本を読む順序（推奨コース）」を 3 つ準備してくださっており、読者に選択権を与えているのです。自分で決めるから責任が伴い「やらなければ」と思ってしまう人間の心理を巧みに導き出し、自己決定させることで読書経験そのものを「自分ごと」にする仕掛けがあるのです。

「自分ごと」になったことには愛着が湧きます。そして「**楽しい**」と思えるようになります。これを授業に落とし込むためにはどうすればよいのか。一番のヒントは著書の中にありました。帯活動で行っている chat のトピックを、“My favorite (　　) is…” にするのです（p.118）。これまでは music や food などのトピックを事前に提示してからチャットに取り組ませていましたが、今振り返るとこちらで与えすぎてしまっていました。どう考えても、(　　)内を自分で考えるという自己決定の機会があった方が、話し手も聞き手も「**楽しい**」に決まっています。

⑤ 五感を使うから「楽しい」

最後は私が新著を読んでいて一番衝撃を受けたこと。

「**そうやってすぐに結論を出そうとしたら面白くないよ（笑）。**」（p.178）

『孤食のグルメ』作者の久住昌之氏の言葉の引用です。そしてこの言葉を引用している項のタイトルが「**『うまくいかない』からこそ大切にしたいこと**」。

「うまくいかない、どうしたらいいんだ…。」と悩んでいた自分のことを思い出しました。そして、その時の自分の視野がとても狭くなっていて、何をするにも頭でっかちになってしまっていたことも。結論ばかりを急いでいて、最短距離こそが正義と決めつけていた自分。

本当に浅はかでした。「自分の足と自分の五感を使って考えるからこそ**楽しい**。」この一文を読んだとき、胸が締め付けられる思いでした。最短距離で結論に至ったとしても、それは全然楽しくない。自分

で感覚を通して経験したものこそ、教師も生徒も「**楽しい**」ものなのだと。

おそらく五感を使って考えるような授業は時間も手間もかかるでしょう。「最短距離」を追い求める教師・生徒からすれば、「遠回り」でしかないかもしれません。しかしここで久住氏の引用に戻ると、最短距離は楽しくない。「**楽しい**」授業を目指すために、もっと自分の感覚を研ぎ澄ませる。そして生徒にも様々な感覚を使って学んでもらう。そういった授業を実現できるように今後一層の研鑽を積んでまいります。

以上の５つが私の発見です。そして何よりこの文章を書いている過程が、とても「**楽しい**」経験でした。この文章を書くという機会を与えてくださった中嶋先生に感謝です。

筆者のコメント（推敲するときに工夫したこと、反省したこと）

高杉 達也（6G）

中嶋先生がまとめてくださった「ビブリオ・バトル・ライター編」のファイルには、中嶋塾に参加している16名の作品が収録されていました。他の方のビブリオ原稿と横並びになっている中で、自分の原稿を改めて読み直すと、自身の作品だけを見つめていたのではわからない、他との比較の中でこそ気付ける自分の強みと弱みを見出すことができました。

また、他と比較からだけでなく、オンライン塾や対面塾のみなさまがくださるコメントからも、自分の書き方の特徴（癖）を知ることができました。

最初の自分の作品は「質素」でした。他の先生方の作品が絵や図、エピソードやメタファーで彩られている中、私の作品は「モノクロ」でした。読み手の視覚を刺激し、深い読みへと促すために、絵や図を使うという発想が全くありませんでした。メッセージの「核」を効果的に伝えるために、エピソードや比喩を用いる発想がありませんでした。「相手意識」がまだまだ足りない自分がいることを思い知らされました。悔しかったです。

今回、推敲して第２稿を作らせていただく機会をいただき、改めて「本選版」を作成しました。自分の作品を少しでも「カラフル」にすべく、次の２つの工夫をしました。

１点目は絵と図の導入です。他の先生の作品を見て学んだのは、視覚的な補助があると、読者の理解に「奥行き」をもたらすことができるということです。各パートの主題を読者により理解してもらえるように、キーワードに関わるものや比喩に関するものを掲載しました。

２点目は比喩の検討です。内容が特に薄かった箇所に、「根」の比喩を使いました。「隙間」がないと根はすくすく伸びていきません。「余（隙間）」を生み出すことは、私の授業における課題の１つでもあります。「新著を読む → ビブリオ原稿を書く → 授業改善へのヒントが見えてくる」という一連の流れが、この推敲の中で見えた瞬間でした。「『エピソード』が語れるのはその本質がわかっているからだ」と風見先生がビブリオ原稿に書いています。エピソード、そして比喩を考えていく過程で、ようやく新著で書かれていたことの「本質」に辿り着けたのです。

第１稿から第２稿、紙面上はあまり大きな変化は見えないかもしれませんが、実は、背景には上記のような「思考の過程」がありました。同じことが授業にも当てはまると思います。「考え、思い悩んだことの全てが、授業の中で視覚的に見て取れるわけではない。だが、より良い授業を目指すためには、その裏でたくさん教師は思考しなければならない」ということです。今回のこの改訂作業でもたくさん思考しました。苦しかったです。ですが、この作業ですらも「楽しい」と、今は思えます。こうして、新たな「視点」を手に入れることができたのですから―。

中嶋先生、塾生の皆様、そしてオンライン塾の皆様、たくさんのご教示をありがとうございました。